

一

豊臣家の人々



司馬蓼太郎

中央公論社

豊臣家の人々 ©一九六七年 検印廃止

定価四三〇円

昭和四十二年十二月五日初版発行
昭和四十二年十二月廿一日再版発行

著 者 司馬遼太郎

発行者 山越 豊

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一（代）

本文製版印刷 中央精版印刷
カバー・扉 大熊整美堂
製本 中央精版製本

臣家の人々 目次

第一話 殺生関白

七

第二話 金吾中納言

三

第三話 宇喜多秀家

三

第四話 北ノ政所

二

第五話 大和大納言

二

第六話 駿河御前

一五

第七話 結城秀康

一六

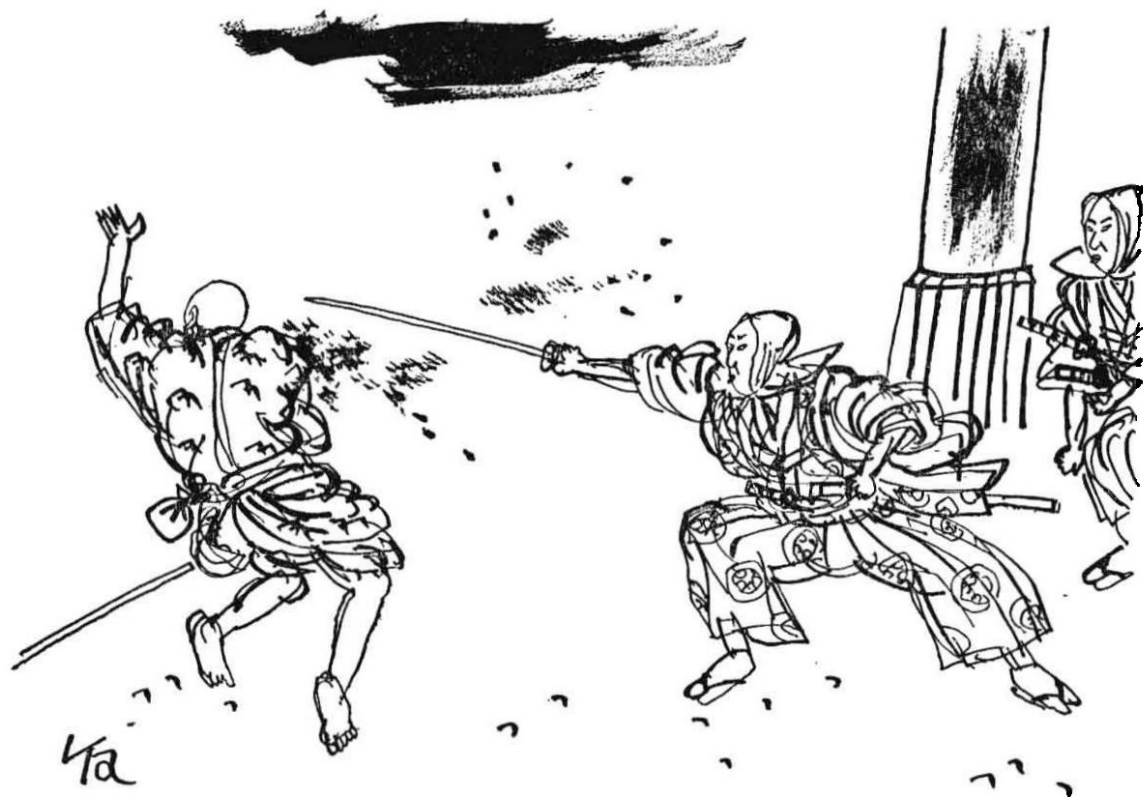
第八話 八条宮

一七

第九話 淀殿・その子

一八

豊臣家の人々



第一話 殺生関白

一

尾張のくに、知多半島の根もとに、大高^{おほたか}という松杉の古寂びた在所がある。

かつては鳴海潟に面した漁村だったといわれる。しかし戦国の中期ごろ、織田家がしきりとこのあたりを干拓したために、潮風からよほど遠い農村になった。しかしそれでも村の小高い所にのぼれば、松の枝をとおして碧い伊勢海が盛りあがって見える。

変哲もない、そういう村である。村の鎮守が、意外にも延喜式による古社であるところをみると、よほど古い時代から村里ができていたのであろう。神社の名を、火上姉子^{かみあねこ}神社という。

「あねこ」

というその社名が示すように、祭神は上古、このあたり

にいたむすめである。美夜受比売という。ふるいころこの土地の土酋であった稲種という者の妹で、大和から東夷の征伐にきた日本武尊と契った。幾夜の契りをかさねたのであろう。ただ古代英雄とそれだけの縁をもったということだけでこの娘の名は古事記に伝承され、この土地では森に祠をつくり、里人たちは遠いころから守り崇めてきている。人間は、ただ一個で存在するばかりは単に畜類とかわらない。縁として存在している。縁という人間関係のなかに存在してはじめて一個の自然一人が人間として成立するといふのは仏家がみつけ出したこの世の機微であるらしい。この美夜受比売のふしぎさは、これから語るべき物語と、象徴的なかわりがありそうである。

戦国のころ、この大高村に、手足のほそい農夫がいた。

弥助と言ひ、わずかな田と小作で生きている。能もなく、容貌もみにくい。妻を早くなくしたために、かわるべき者を物色していた。こうした村々に、行商人がくる。これらの商人が、まるで風媒をする風のように嫁や婿の世話をしてゆく。中村在に——とその一人がいった、かつこうな女がいる、出戻りではあるが幸いにも子はない、どうであろう、と橋渡しする者があって、縁談ができあがった。

女は、おともという。醜女である。弥助は失望したが、

これがのちに瑞竜院日秀という、日本にかくれもない貴婦人になろうとは、むろん弥助は夢にもおもわない。

この階層の者に、婚儀というほどのものはない。門口にかがり火を焚き、縁者や近隣の者に酔のうな酒をのませ、それだけで事はおわる。一同が帰ったあと、おともは板敷のうえで膝をそろえ、帰るべき実家がありませぬ。末永うお可愛がりくださいませ、と、姿にも似ず可愛気のある声調子でいった。

(これは儲けものじゃ)

と弥助がおもったのは、この声としおらしきであった。なるほどおともには実家がないのと同然である。実父は自分と弟を母に生ませたあと、早世した。母は途方に暮れ、隣家の竹阿弥という男を家に入れて再婚し、この竹阿弥の子をも、このたび生んだ。義父の竹阿弥は圭角の多い男で、このためおともと同父の弟は家をすてて出奔してしまった、自分もわが生家ながら実家という感じがしない、というのである。「かえっておれにはそれがありがたい」と弥助はいった。いつまでもさと恋しの嫁をもつことは亭主の不幸であらう。早う根をはやせ、この里をおのれがうまれ在所とおもえ、「なにごと縁ぞ」とも弥助はいった。

「何事も縁ぞ」と弥助はいふ。ところが、妙な縁が、世の一角で芽生えはじめていた。それも弥助夫婦の関知せぬ場

所で芽生え、生長し、ほとんど奇蹟のような勢いで伸びつつあった。猿——というのが、この嫁の弟の幼名である。ちなみに、太閤素生記という書物がある。述者は、稲熊助右衛門という中村代官の娘で、幼時、この姉とも弟とも遊んだ。彼女は老後、その養子の土屋知貞に、自分の村から出た稀世の運命のもちぬしのことを語り、それを筆録させた。それに言う、「幼名を猿、あらためて藤吉郎。後、筑前守」これが、おともの弟についての簡潔な書き出しである。さらにこの書物は言う、「信長公より羽柴氏を賜う。故に羽柴筑前守と号す。後、関白に任じて豊臣の姓を賜う。……太閤姉、同所（尾張中村）にうまる。瑞竜院と号す。右兩人は一腹一生」。

この嫁の実弟秀吉の栄達が、大高村の弥助におもわぬ一生を送らせてしまった。

弥助は名さえ、変えさせられた。その名も、

三好武蔵守一路

というのである。わが身の変りかたに驚くいとまもなく、「弥助殿、大名になられ候え」

と義弟の秀吉は言い、尾張犬山で十萬石という諸侯にしてしまった。さすがに弥助は大名になる自信がなく、封地にはゆかず、秀吉の直轄領にしてみらい、祿のみもらって

大坂で住むという形式をとらせてもらった。

（もはや、わが身がわが身ではない）

ぼう然とする思いである。三好姓をつけられたといういわくも、一種奇術のようなものであった。秀吉は卑賤からあがただけに、一族を、たとうそでも綺羅をかざらせる必要があった。阿波の名族三好氏というのは一時は京を支配していたこともある巨族だが、いまは没落し、かろうじて笑巖入道という老人だけが生き残っている。盛んなころには三好山城守康長と称し、摂河泉三州に武威をふるい、信長に駆逐された。いまは老残の身を秀吉に寄せ、秀吉もこれを諸侯として礼遇し、御伽衆に加えている。この笑巖入道に、

「入道、わぬしが姓を、わしに貸せ」

と秀吉はいった。笑巖は、秀吉の命であればきかぬわけにはいかない。そこでついに、弥助夫婦を養子名義にした。夫婦だけでなく夫婦が生んだ子も孫にし、そのうちの次兵衛という者を三好家のあととりとし、世襲名である孫七郎を名乗らせた。

三好孫七郎秀次

というのがのちの関白秀次である。要するに、かれの両親の弥助夫婦は自分の運命についてなんの努力をしたわけではなく、ことごとく「縁」でもってこういう貴族ができ

あがった。孫七郎秀次も、この奇遇の恩沢を享^うけている。うけはしたが、しかし孫七郎はその両親とはちがい、多少の努力はした。いや多少どころではない。

二

孫七郎秀次は、元服すると河内で二万石の所領をもらい、以後、叔父の秀吉にとりなわられて十代の半ばから合戦に参加した。むろん最初から一方の大将である。十六歳のときは、伊勢の滝川一益征伐に参加した。

「はげめ。励むと、よいことがあるぞ」

と、叔父の秀吉はことごとくにいった。よいことというのは、秀吉の後嗣になるということであろう。妥当ではある。この世で秀吉の血をもっとも濃くうけているのは、この孫七郎である。次弟の小吉（秀勝）もそうだが、しかしこの次弟は知能がやや遅れ、しかもうまれついでに片目であった。第三弟の幼童はのちに秀俊と名乗る人物だが、これは早くから秀吉の異父弟秀長の子として貰われて行っているから、圈外といっている。要するに秀吉の血流の若者は、姉おとも、うんだこの三人しかいないのである。

——この御方が、惣領におなりなさる。

ということとは、諸将も見えた。自然、老練の将たちは孫七

郎を秀吉名代であるかのごとくあつかった。

これを笑止とみてあからさまに孫七郎を軽侮したのは、秀吉の数すくない血縁のひとりである福島正則ぐらいのものであった。尾張清洲^{きよす}の桶屋の子にうまれた市松正則は秀吉の亡父の血縁である関係から少童のころから羽柴家の台所飯で養われ、児小姓になり、賤ヶ岳では功を立て、いまでは物頭になって三隊を率いている。元来、正則は感情がつよく、狂夫かと思われるところがあり、かつ秀吉の格別な身内であるという意識のつよすぎる男であったために、孫七郎を嫉妬の感情を通してしか見られないらしい。

「土塊^{つちくれ}でもほじくっているだけが能^{のう}の男よ」

と、人もなげに評していた。百姓でもしていればいい男だというのである。たれかが孫七郎を「公達^{きんだち}」といったとき、正則は真赤な口をあけて笑った。あの若衆が公達か、なるほど衣装は公達なれど中身は荷駄の小者さえつとまりかねる男ぞ、とわめきちらした。

その蔭口は孫七郎の耳までは伝わらなかったが、その種のことゝが囁かれているであらうということは感じていた。自然、虚勢を張るようになり、輔佐の老将たちにまで尊大な態度をとるようになった。十六歳の身で、である。

しかし、合戦については輔佐役たちがすべてとりしきっているために大過はなかった。大功もない。この若者が、

戦局を——というより歴史を左右するほどの行動をもったのは、その翌年の十七歳のときである。

その合戦は、のちに小牧・長久手の戦と呼称されている。時期は秀吉が日本の中央部二十四ヵ国をおさえたころのことで、この勢力をもって東海方面に蟠居している徳川家康を圧しようとし、みずから大軍をひきいて尾張に進出した。家康も本国の三河を空にして尾張に布陣し、ほとんど三倍の兵力の秀吉軍と対峙した。たがいに相手の虚実を見抜きあい、睨みあったまま動かず、双方、堅固な野戦陣地を構築し、戦線は膠着のかたちをとった。この場合、軽々に兵をうごかした者が負けであろう。敵が動けばすかさず襲つ、という態勢を双方がとっている。

秀吉は自重に自重をかさねたが、ここにかれにとって思わぬ人物が献策してきた。旧織田家の同僚であった池田勝入・輝政父子で、にわかに天下をとった秀吉としては機嫌を損じたくない相手であった。池田勝入は、功に逸っている。かれが献策するのに——家康の本拠である三河が空になっている。いま隠密行動の遊撃軍を編成し、ひそかに迂回行軍して長駆三河を衝けば家康はおどろき、戦線をすてて国へ帰るであろう。この遊撃軍の先鋒を自分にうけもたせていただきたい、というのである。秀吉は賛成しなかった。家康に気づかれてしまえばこれを破綻として全軍にひ

びくことは確実だからである。勝入は翌日、かさねて懇願した。秀吉は勝入の心を離れしめないためにゆるした。ただこまごまと注意した。

早速、遊撃軍が編成された。先鋒は池田勝入、中軍は森長可・堀秀政、といったように織田時代から猛将として知られている将がえらばれ、殿軍は三好孫七郎秀次が担当し、同時に遊撃軍そのものの大将をも兼ねた。かれら総数一万五千が、尾張楽田の陣地を出発したのは天正十二年四月六日の深夜である。物狂坂を忍びやかに越えて家康の陣地の前方を通り、第一日目はみごとにその行動を察知されずに済んだ。家康が知ったのは、翌七日の、それも陽がかげりはじめた刻限になってからである。かねて家康が密偵として秀吉軍に忍ばせておいた伊賀者服部平六という者が帰陣し、これを急報した。

秀吉の一隊がうごいた、という報に家康は、狂喜したであろう。家康は日没とともに行動をおこした。かれのとった方法は、敵の隠密軍に、かれもまた隠密行動で追尾することであった。家康は小牧の本営から九千の兵をひそかに脱せしめることに成功し、そのあと早駆けの夜行軍をもってあとを追った。やがて深夜に敵の後尾を発見した。

「敵の後軍の将はたれぞ」

「三好孫七郎殿にござりまする」

と、家来の一人がこたえた。家康が、秀次の存在を具体的なものとして感じた最初であった。

「どういふ人物だ」

と、敵情に詳しい者にきいた。秀吉の養子分であるという。齡は十七。しかも解しかねるほどに珍妙なのは、この若大将が身につけている武具であった。

孫七郎秀次はその生涯を通じての性癖のひとつは収集狂であったことだが、この時期にはしきりと有名な武将の武具をあつめていた。たとえばこの男の大将としての表徴である馬印は、越前北ノ庄で敗死した織田家きつての勇将柴田勝家所持の金の纏である。かぶっている兜は、美濃出身の武刃者でいまは秀吉につかえている日根野備中守弘就の唐冠の兜をむりやりにねだって手に入れたものであり、肩に羽織っている鳥毛の陣羽織は、近江出身の豪傑でいまは秀吉の軍中にある木村常陸介の常用のものを頼み入って手に入れたものである。いわば当代の英雄豪傑の戦場装束をよせあつめて身につけているようなものであった。

「変った仁じゃな」

家康は小首をひねり、失笑した。家康にとって知りたいのは、敵将の強弱であった。先鋒の池田勝入の勇猛は天下に知れているし、中軍の堀秀政は歴戦の達者であり、森長可は美濃斎藤家の旧臣で、武蔵守と号し、信長に仕え、あ

らゆる戦場を馳駆して鬼武蔵の異名をとり、かつこの一族は、その実弟の蘭丸、力丸が本能寺で信長をまもって奮戦し、それに殉じたことで知られている。いずれも、強すぎた。奇襲の効は、敵の弱点をつくところにある。家康は孫七郎の装束の珍妙さをきき、

「その仁は、きつと弱かろう」

といった。家康のみるところ、その秀吉の縁者は自分の臆病と無能を、そういう虚飾でかざろうとしているのである。そのように人間観察を遂げたあと、家康は孫七郎軍に攻撃の重点を置き、方法は包囲をもってした。

白山林

というところに、孫七郎軍は夜営した。東方は高地で西へ傾斜し、道路は谷になり、南北に一筋しかなく、道のまわりは鬱然とした森林である。この地形からみて、孫七郎はまるで襲われるためにのみ夜営したとしか言いようがないであろう。しかも攻撃者の家康自身でさえ驚いたことに、哨兵も出さず、物見も怠っている様子であった。楽な戦になる。一人のこらず殺せ、と家康は命じ、夜のうちに九千の人数を山林のなかに忍び入らせ、完全に包囲したうえで時刻の過ぎるのを待った。

夜が明け、孫七郎軍は起き、起きあがったが気づかず、ざわめきながら朝餉の支度にとりかかった。家康軍が全力

をあげて強打をくわえたのは、このときである。

すでに戦ではなかった。屠殺であった。ほとんどの士卒が食器をすて、馬をすて、身一つで逃げるのが精一杯であった。

孫七郎は、すでに大将ではなく、狩場の走獣のような神経だけがかれを支配していた。逃げるべく馬のそばに駆けよろうとしたが、すぐ樹林から突撃してくる徳川兵を見て動転し、徒歩でそのあたりを方向もなく走りまわった。この間、かれの下知したことはただ一つしかなかった。「久兵衛をよべ、久兵衛をよべ」と連呼した。久兵衛とは、かれの先鋒隊長である田中吉政のことである。吉政は近江の出身で、足輕から身をおこして諸方に歴仕し、秀吉に目をかけられ、いまでは孫七郎付き隊將として世にも知られた男であった。この男の隊のみが、この混乱のなかにあって潰走もせず、かろうじて踏みとどまって敵をふせいでいた。「なに」とだろう」と吉政は不審に思い、防禦線を撤してひきあげてくると、

「勝入や武蔵にこの急を告げよ。たすけに来いと言え」

と、孫七郎はわめいた。吉政はばかしくなった。伝令の役には使番という者が大将のそばには居る。第一線の隊長を、それも防戦途中によびかえして伝令につかうとはどういうことであろう。

それに口上がよくない。いまこの混乱は後軍の一手で食いとめるべきで、数里さきの前方の隊をよびにゆき、たとえかれらが救援に到着したところでふたたび敵の餌食になり、蟻地獄のようななかに陥され、この山間で各個に撃破されてしまうだけである。その二つの理由で吉政はことわった。が、孫七郎は狂氣したように叫び、あるじの言うことがきけぬか、斬る、と喚いたためやむなく一騎で駆けだした。一時間ばかり懸命に駆けて堀秀政に追いつき、後軍の総崩れをつげると、

「久兵衛、うぬは使番にあらず、三好家で軍配を持つ身ではないか。さては臆して逃げてきたな」と、衆の前で面罵した。吉政は赤面して去り、戦場から離脱しつつ、

(ゆくすえ見込みのある大将ではない)

と孫七郎を見かぎり、この合戦のあと、身をひいて浪人した。その後、余談だがこの男は同郷の石田三成のとりなしで秀吉の直臣となり、その器量を見こまれて十萬石をあたえられ、のち関ヶ原で家康に属し、筑後柳川で三十萬石をあたえられた。

吉政が伝令に去ってからの孫七郎の軍はもはや一軍のていゝをなさず、みな徒歩走りて逃げた。孫七郎も逃げつつ、多少の智恵を働かせた。唐冠の兜、金纏の馬印、鳥毛の陣羽織といったかれの豪傑の表徴はすべて捨て、身一つで駆

けた。こうすれば敵は葉武者としか見ぬであろう。その前方を、可児才蔵が自慢の馬をうたせ、笹の指物をややかしげながら悠然と逃げてゆく。可児は美濃人で、槍をとってはこの男におよぶ者はないといわれた男である。秀吉は孫七郎の訓練にもと思い、この種の戦巧者（いくさこうしや）を多く配属させていた。可児はさすがに戦場の古強者らしく、逃げ方までどこか物馴れてみえた。「才蔵、才蔵」と、孫七郎は追いつがるようにして呼ばわった。孫七郎にすれば、可児には用事がない。ほしいのはかれが乗っている馬であった。

「馬を貸せ」

孫七郎がいうと、可児はぎょろりとふりかえり、

「雨降りの傘でござる」

と言いつて去ってしまった。雨降りには傘が要る。退却のときは馬が要る、やすやすと貸せるか、という捨てぜりふである。可児のような美濃斎藤から尾張織田に歴仕してきた戦場玄人にすれば、このばかばかしい敗残ぶりをみてこの主人の前途を見限る気になったのであろう。事実この男はのちに致仕し、福島正則に転仕している。

そうするうち、孫七郎付きの隊将のひとり木下利直が落ちてきて、孫七郎にわが乗馬をあたえ、自分は徒歩立ちになり、その地に指物を突き立て、むらがる敵をひきうけて戦死した。おなじく弟の周防守利匡（としま）も兄をたすけ、徒歩の

ままで戦って戦死している。孫七郎はあとをもみずになげたたため、このふたりの最期をさえ知らない。

この崩れはたちまち前方の味方に波及し、先鋒隊長の池田勝入はその子之助（ゆきすけ）とともに戦死し、名将といわれた森長可も敵の重囲におち入り、鉄砲で射ち落されて死んだ。いずれにせよ、遊撃軍は全軍潰滅したといっている。

この長久手の敗戦後、秀吉は家康を外交で孤立させ、かつ講和し、ついには臣従させて豊臣家の諸侯にしたが、しかし家康にとってはこれがその威望をあらわす最大の履歴になり、秀吉を生涯遠慮させ、その死後、天下の切望をあつめるもとになった。もし孫七郎の失敗がなければ秀吉は捷（か）ち、家康は敗亡し、秀吉の禍根のたねはこのときに消滅していたであろう。このことはたれよりも秀吉が知っていた。

孫七郎にはわからない。逃げ帰ってから秀吉のもとに使いを出し、

「かわりの将をください」

といった。孫七郎にすれば、木下兄弟が死んだため、それに代わるべき人物が要る、お側からよこしてもらいたいというのである。名指しまでした。武勇かくれもない池田監物（けんぶつ）がほしい、という。その口上はまるで品物でもとりかえるようであった。